只見短歌会　十月詠草

大塚栄一　指導

娘にさへも生き来し歩み愚痴らずに気づけば我も米寿間近し　馬場　八智

里芋の葉に水銀の玉のごと残れる露を回して眺む　小倉キミ子

退院せし庭をめぐりて蜻蛉群れ寄りゆくわれの肩に止まるも　古川　英子

父逝きて一年経てど迎へなきと在宅療養の母はつぶやく　新国由紀子

皆既月蝕暗くなり来し空見上げ時計覗きて月の出を待つ　渡部ゆき子

列車待ち何気なく外を眺めをり芒コスモス風に揺らぐも　関谷登美子

わが留守に幼らかけてみたるらし老眼鏡に指跡残る　目黒　富子

幾度も足の手術をせし友が夕べの道を歩みみるなり　五十嵐夏美

調理器具並べて惣菜作りみるわれに声かけ孫は手伝ふ　渡部ヨリ子

冬の間を同居せし友畑あると帰りて日ごと野菜が届く　新国　洋子

只見俳句会　十一月例会

目黒十一　指導

神々が餅比べする九日祭　一穂

傾いて又傾いて芋水車　都

皆既月食素足に下駄の暖きかな　敦子

白犬の影遠くなり草紅葉　洋子

立冬や曳屋小昼に粕あぶり　吉児

ビリヤード大会制し紅葉鍋　恒夫

一日旅夕日を返す木守柿　邦男

山間の手押し車の大根引　礼

ダイコン引き腰の痛みも忘れおり　信

老いてなお学ぶ楽しさ長き夜　順子

柿畑を過ぎ火葬場近づきぬ　リウコ

眼に見える大根育つ速さかな　修一

味噌倉の味噌の匂いにそぞろ寒

滑り台手すりのヒビに台風来

大根のさもぐったりと干されおり

足跡をつけまいと思う雪野かな

冬の虹会津盆地を釣るがごと

立ち尽す高倉健の冬帽子

心地よき日差や笊の菊の花

黄菊摘むこころの隙間隙間へと

萩原や朝の湯気立つレストラン

瞬きをして遠ざかるいぼむしり

朝靄のベールを脱ぎし紅葉谷

朝陽差す露天の風呂に紅葉かな